

令和7年度 麻生区市民提案型協働事業 審査委員会 議事要旨

- 1 開催日時 令和7年4月21日（月）14時00分～16時00分
- 2 開催場所 麻生区役所4階第1会議室
- 3 出席者 [委員] 小倉委員長、大和田委員、小林委員、俵委員、小佐々委員
[事務局] 田島課長、森下課長補佐、渡部係長、田中職員、高木職員、嶋田職員
- 4 傍聴者 なし
- 5 議事
 - (1) 審査委員会事前説明（13時45分～14時00分）
 - ・事務局から進行及び提案事業の内容について説明
 - (2) 公開プレゼンテーション（14時00分～16時00分）
 - ・団体からの発表
 - ・委員からの質疑応答

① ふりーたいむ コネアグ（NPO法人 connect）

【講評・主な質疑応答】

（委員）

子どもたちをどういう手段で広報し、集める予定か。実際に何人ぐらいを目標とされているのか。

（提案団体）

チラシを作つて、各小中学校に細かく営業していきたい。学校、アフタースクール、フリースクール、こども食堂などに情報を届けていきたい。

10組ほどの親子計20人程度を想定している。すでに関わっている団体でも、子どもの自然体験が圧倒的に少ないということで、ぜひ参加していきたいという申し出があり、参加人数の半分くらいは確保している。

（委員）

学校でチラシを配るということだが、現在はアプリに移行してチラシは配れないことになっているため、検討された方が良い。

（提案団体）

チラシが駄目だった場合に、Xで1万人ぐらいフォロワーがいる方に拡散をお願いしており、OKをいただいているので、メディアやSNSも活用したいと考えている。また、サイトの制作準備中。

（委員）

農家さんとも調整しているということだが、単独の畑で引き受けさせていただけるということか。また、イベントスケジュールが6月から12月までだが、できたものを採るだけは農作業ではない。できれば播種から、面倒を見て、収穫まで、そうした流れの体験ということを考えているようには見えないスケジュールと感じた。

（提案団体）

一点目について、単独の畑で予定している。二点目について、確かに収穫だけと思われるかもしれないが、最初まず関わっていただくところが大事。今後それを計画的に、年間を通して活動できるように私達も勉強を重ねていきたい。

(委員)

土いじりが健康に良いなど医学的なことが書かれているが、非結核性抗酸菌症など、逆の問題もあるので気をつけていただきたい。

将来的なビジョンとして就農者を発掘したいというのは素晴らしいことだが、就農はものすごくハードルが高いので、このアイディアだと難しい。普段から食物に興味関心を持って、適正価格とか、作物に感謝を持ってもらえるような活動が必要。このシステムで就農者を養成するというのはあまりにも飛躍的。

(提案団体)

今後医学的な部分に関してはもっとしっかりと勉強し、皆様のアドバイスのもと、学んでいきたい。食物への感謝は本当に一番大事なところだと思うので、そこはしっかりと伝えていきたい。

(委員)

一点目、20名想定ということだったが、もし好評だった場合は枠を増やすことを想定しているか。

二点目、引きこもり等の課題のある子どもたちが参加するのは良いと思うが、そのような家庭は体験に費やす余裕がなかったり、あまり新しいことを好まなかったりすることもある。ただ一方で、そういう人向けというニュアンスが出過ぎると行きづらくなってしまうジレンマもある。例えば子ども食堂みたいなところをメインにやっていくなど、イベント参加につなげていく構想があれば伺いたい。

(提案団体)

一点目について、受け入れていただく農家さんの都合もあり、現状枠内で考えているため今この場でお答えすることは難しい。あとは、先着順か、抽選か、子どもの事情を汲んでなのか、やりながら方法は考えたい。

二点目について、チラシ作成など、区役所の方とも相談して、意見をいただきながら完成させたい。また、すでに関わりのあるフリースクールにも御指導をいただきいて、既にそこから私達コネクトにつながって一緒にハイキングに行くなどの活動もしている。まずはそうしたつながりを大切にして活動したい。

(委員)

なぜ麻生区で実施するのか。

(提案団体)

自分自身麻生区在住で、自然とのふれあいが好き。農業の苦しい状況と子どもたちの息苦しさのようなものをつなげて、それぞれの未来につなげられないかと思ったのが最初。不登校までいかなくともなんとなく学校に行きたくないとか、表面化していなくても重たいものを抱えている子たちのストレス発散になれば。

(委員)

NPO法人を今回立ち上げたということで、将来的には何を目指すのか。就労支援なのか、市民活動ベースでずっといくのか。

(提案団体)

できることを全力でやっていく、可能性としては就労支援の方もあるかもしれない。日々勉強させていただいているところ。

(委員)

年齢はいくつぐらいまでを想定しているか。

(提案団体)

高校生ぐらいまで。大きくなると自分で行くとか判断するようになると思うので、もうそれ以上の募集は行わないと思う。もし参加希望があればその時考えたい。

(委員)

私の方でもこども食堂に携わっているので、チラシ配布など、御協力できることがあると思うので言っていただければ。

(委員)

親御さんが、気にして一緒に行こうという方が多いのか、それとも高校生ぐらいであれば自分で見て、でもそこで親御さんに一緒に行ってとなるのか。

それから、1年間の活動では、固定的なメンバーで進めていくのか、それとも時期に合わせて集める形を変えていくのか、活動の広がりについての考えを伺いたい。

(提案団体)

お子さんのことが気になる保護者の方が多いという気がしているが、子どもが離れたがらないということもあるし、保護者の方の精神状態もあるため、一律で決めるのではなく、人数のキャパやお子さんと親御さんの性格など考慮しながら柔軟に対応させていただきたい。

広がり具合については、おそらく人数が少ない場合は同じメンバーで進めることになり、たくさん参加希望があればいろんな人に体験してもらいたいので、回でメンバーを変更することも考えられる。

② 麻生区大学連携 “かわさきワインプロジェクト”（特定非営利活動法人 岡上アグリ・リゾート）

【講評・主な質疑応答】

(委員)

大学連携というところで、発表会などに一般の人を入れないので。

(提案団体)

外部の方に聞いていただかないと学生たちの学びにならないので、発表は学生だが、外部の方が自由に来ていただいて見ることができる発表にしようと考えている。

(委員)

今後続けていくときに、自走で行くことを考えた場合、今の予算では大学にお金を払っているが、やはりそうしないと動いてくれないというのが現状なのか。

(提案団体)

将来的には自走できることが当たり前だが、大学と連携する難しさとして、よく様々な企業から大学連携の話があるが、無償で大学生が動いてくれるからやるというのが、日本全国の大学の課題。将来的には収支を合わせる必要があるが、外部の人にもちゃんと収支が見えて、こういうふうにお金を使って

でも大学との連携が必要だということを知ってもらう意味もある。

(委員)

それも必要だと思うが、逆に大学自身が必要であれば予算を組んで、地域との連携について意義を認識しお金を払うということも必要ではないか。

(提案団体)

大学側にお金を出していただくのは今後大事になってくると思っているが、最初の取組のときに大学の理解を得るまでは、やはりどちらかというと提案側がその部分を担わなければいけないところがある。

(委員)

今の取組状況からすると、資金はまかなえるのではないか。それをあえてこちらの市民提案型協働事業で実施するのはなぜか。

それから大学生の無償使いという話があったが、学生の方は学費を払って学びに来ていて、もしゼミで來るのであれば、費用は不要ではないか。大学の枠ではなくボランティアであれば支払いが必要と思うがその整理について伺いたい。

そして、地域課題をどう解決する取組なのか、もう少し具体的に知りたい。

(提案事業)

資金について、NPOとして資金はない。今後どういうふうにやっていくかの一つとしては、株式会社で得たお金を NPOに入れて運営するというのが一つある。そうした収支の仕組みを考えていかなければいけない。

支出の部分については、デザインの授業など教えてもらうにあたってプロの意見が必要で、学生の学びというよりもこちらから謝礼という形で出すべきと考えている。学生への謝礼については、イベント運営などアルバイトと一緒になのでその分の費用。

地域課題については、区内の多様な大学を1つにまとめる事、若い力が地域にあることによって地域を活性化することが麻生区で表現すべきものだと思っている。若い人たちと多世代の人の交流も元気なまちをつくる上で大事なので、イベントでは一般の方、多世代の方と学生が触れ合って、意見交換をする。それが麻生区の活性化につながる一つだと考えている。

(委員)

NPOで一緒に活動する方に地域の方ももっと入ってきて、市民活動としてやっていく中に、株式会社も使っていく形になっていくのかなと感じた。課題について、大学生という枠組みで若い方とあるが、もう一つ麻生区にいる若い方もセットで、できるだけ強くやっていただきたい。

(委員)

昨年活動する中で、参加した学生からのリクエストやこうなった経緯などあれば伺いたい。また、例えば大学生に限らず地域の方も興味があれば授業に入って聞くことができたら良いが、学生だけにしている理由があるのか。

また、今回の提案事業外ということだが、岡上ワイナリーヴィレッジは地域の居場所を目指しているということなので、この事業とその到達点につながりがあるのか、または違う話なのか、イメージしていることがあれば伺いたい。

(提案団体)

一点目、大学間の連携によって、ほかの大学でこういう取組をやっているなど、情報共有ができた。また、外部の人間や多世代の方に触れ合う機会は、通常学園祭くらいしかないが、外部でイベント出展するとなると、ダイレクトにお客様からの答えが返ってきて、リアルにコミュニケーションが取れていると思う。学生たちもこういう意見がもらえたからまた来年こういうことをやりたいといった声が出て、外部のイベントに出ることによって得られた生きた知識を感じている。

二点目、一般の方にも入っていただきたいと私も思っているが、大学のセキュリティ面や日程調整があり実施が難しい。ただ去年の成果があって今年も連携して実施できるので、将来的には一般の方をどう入れ込んでいくか目向けていきたい。

三点目、先の目標は色々あり、今後農業者の育成というところも課題として入れている。

農業委員会の方で認めていただき、農業教育として年間何百時間というカリキュラムで農業者育成を川崎市で、日本で初めて認めるなどを、今打ち合わせている。ワイナリーヴィレッジについてはまだ情報を小出しにしていて、多分今年度の3月の発表のときにはもう少し御説明できると思う。

(委員)

印刷製本費が結構計上されている。今は紙ではない方法も色々あるが、紙の良さがあるということか。

(提案団体)

去年100周年リーフレットを作成した際、手に取って見てもらえる良さがあった。先週神奈川県知事に表敬訪問した際も、紙があったからこそ手に取って記者の方に見てもらえた、県知事にも見ていただけた。ネットは、興味があってわざわざ見に行かないといけないものだが、紙は勝手に渡ってくる部分があり、それを得た人が写真を撮ってSNSで拡散した方が、経験上広がりがあるように思えたので、今は紙を採用している。

③みんなで作る更年期の未来（一般社団法人 Miraiall かわさき）

【講評・主な質疑応答】

(委員)

去年の幅広い層から、今回は焦点を絞って提案いただいている。年齢的なところや本当に来てほしい層に届けるためには一般的なチラシというより、町内会、PTA、民生委員などいわゆる地域の人たちと密接につながっている方たちとの連携が必要かと思うが、どのように考えているか伺いたい。

(提案団体)

昨年も保健師さんやソーシャルデザインセンターさんと連携させていただいており、更年期を経験した方々を集めるのはそちらの方かなと考えていた。更年期にこれからなる方を集めるにはチラシなどで集めていくのと、あとは中小企業の男性経営者の方にぜひ入ってほしいと思っており、麻生区の企業にチラシを配ったりお話しに行ったりしている。大企業は専門の窓口の人が置ける一方、中小企業では専門で置けないところがあり、地域の中でどこに相談に行ったら良いかがわからない。婦人科に行ってもどうせ治るからと言われて帰されることもある。

ドクターを1人見つけて支援をいただけるよう当たっているところだが、まちのクリニックだと会

議に出るためにクリニックを閉めないと対応ができないため、大病院の勤務医、できれば女医さんにプロジェクトに入っていただきたいと思っているところ。

(委員)

権威のある専門医、研究者のアドバイスが必要で、それにはぜひ麻生区がバックアップをしてほしい。その方から更年期の正確な状況をお伝えいただいて、親子教室のように性別関係なくしていただければ。

(委員)

「価値の提案」と、「困りごとの解決」という話をよく私はするが、本事業は「価値の提案」に近い。更年期の時期にあること、困りごと、症状から攻めていく切り口があるのかなと思った。

また、私が感じている麻生区のセグメントとして、サラリーマンが多くて、最近共働きも増えて保育園がある、そうすると南武線ではなく小田急線に乗って都心に出る人が多い。そういう人のニーズをクローズアップして、情報を取っていくことができるのではないかという感想を持った。提案団体としてはどのように感じているか。

(提案団体)

小田急線で都内に行ってしまうというのはあると思う。介護や保育の分野は本当に人手不足で、こうした分野は地域で働く人がすごく多いと思う。

そして、そういう働く人が更年期でダウンしてしまうと大変な損失になる。病院をたらい回しにされて結局更年期だったという話も聞くので、事前に知っているということが大事。何かあったときに相談でいる窓口が地域にあつたら良いと感じたいので、地域でやりたいと思った。

(委員)

「更年期」を前面に出しすぎると、更年期かもと悩んでいる人だけが来るようなイメージがあるので、今悩んでいる人以外を引き付けていく工夫が必要と感じたが、アイディア等あれば伺いたい。

また企業との連携というところで、薬局にイベント協力やチラシの配架に協力してもらうのも良い。

(提案団体)

薬局との連携は良いと思う。ほかに、発信が上手な企業にダイレクトメールを送って、一部お返事もいただいているところ。

(委員)

更年期はそれ自体枠が広い。人によっても全然違うもので、経験談だけだと伝わり方が難しく、枠がずれていかないように気を付ける必要があると感じた。

また、麻生区から取組をスタートさせることに意味があれば伺いたい。

(提案団体)

更年期に着目したのも麻生区市民提案型協働事業があったからこそ、これだけ周りに困ってらっしゃる方がいる、どういうケアをしたら良いかわからないなどの状況を知ることができた。全国の中でも三、四カ所しかこの取組はしていないというところで、麻生区の職員の方々と一緒に取組、今後川崎中に広げることができればと思う。

④ 新百合ヶ丘マインクラフト化計画（一般社団法人 サステナブルマップ）

【講評・主な質疑応答】

(委員)

子どもたちが作った最終的なイメージを発表する場はあるのか。

(提案団体)

毎年共催をさせていただいているサステナブルマルシェを今年もやるのであればステージとして出せる。イベントのときに実際に大きな画面で御覧いただけるかもしれないし、区のホームページに載せて遊びに行けるという環境も作れると考えている。

(委員)

個人で参加するのか、チームとして団体戦で参加することも可能なのか。今川崎市こども文化センターのプロジェクトでゲームを団体戦でやっている。また、人数制限はされるのか。

(提案団体)

基本チーム戦。個人でまちづくりをしてしまうと個人の想念になってしまって、地域活動はコミュニティ化をいかにできるかということだと考えている。

参加人数は5～6人で1チーム、学年によっては受験があるから途中で抜ける子もいるし、ずっとレギュラーでいける子もいると思う。考慮しなければいけないのは通信環境。提案書の見積もりでもモバイルルーターを入れているが1カ所に集まってとなると限界がある。あとは、「マインクラフト」でどれぐらい集客できるかまだ読み切れていない部分がある。

(委員)

わからない方がいるはずなのでそこをどう一般的に広めていけるかという観点があると良い。練習会や勉強会、ゲーム自体はデジタルなものだがボードゲームなどあっても面白い。

また、見積もりはリーズナブルだが総額が少し大きい。印刷製本費の割合が高いので、あと1割くらい減らせると良い。

(提案団体)

どうやってやるかはまさに子どもたちが思っていることで、まちづくり計画って何なの、どうやって作ったのというコミュニケーションが生まれることで、まちづくりをどうやっているかという振り返りができるといけると良い。

見積もりに関して、小学校のチラシの配布は今できないとなったとき、個別の学校ごとにOKであれば、例えば今回であれば新百合ヶ丘駅前の小学校中学校に直接アプローチできた方が良い。親としての意見としてはイベントアプリは見ていないので、広告宣伝費を使った方が利点があるのかなど。

(委員)

川崎市、新百合ヶ丘というと、初めてこのマインクラフトをまちづくりに生かす取組をするには規模が大きい街だなというのが率直な感想。

また、2-6-2の法則というのがあるが、上の2の方が中心になってくると思う。そうすると6のところをどう巻き込んでいくかが勝負。どうにか学校の総合学習の時間に入らないか、中学であれば各学年分がもし揃うのであれば、共生教育の中でできないかとか。ここよりPPPの方が合うのかなとも感じた。

懸念として、塾的なところでの提案になっていくのか、それとも市民の人たち、若い人たちの意見と

して出していくのか、1年ではなくて多分3年ぐらいかけながらやっていくのではと感じた。

(提案団体)

3年間しっかり作り上げることによって、学校もその一つの枠として入れていってもらえたなら良い。というのも、この市民活動、サステナブルマップ作り自体が東京都の教育委員会のプログラムの中の一つとして、授業を今やらせていただいている。参加する子どもたちが、私立か公立かでも全く話が変わる。私立校だとその地域に住んでいないので、公立向けのアプローチとして今後授業するまでやっていければ良い。

まちづくりはあまり経験できることではなく、地下鉄が入ってくるとか、気づきを形にするという意味では正解がないものなので、自分たちで作っていくにはこのプロジェクトを進める価値がある。

2-6-2の6割は私も重要だと思っている。私は正直マイクラフトをやったことがない。先程プレゼンで説明した柏市は塾として、プログラミング教室もやっている。そのノウハウを提供してもらう予定。あとその6割を拾い上げるために、マイクラフトに人生を捧げているくらい詳しい高校生に入つてもらう予定で、そうすると自分の近い将来像がそこにあると思うので子どもたちはアクセスしやすいのかと思っている。いろいろ状況が変わってくると思うので、できないことも含めてこの活動の中で、価値を見出してくれるといい。

(委員)

具体的に今年度イベントを考えているのか、それとも今年度はここまで、来年度以降展開していくなど、具体的なプランがあれば伺いたい。

また、子どもの地域での居場所になっているようなところに、例えばこども食堂などにも、多様な体験としてまちの魅力発信など色々な情報が届くと良いと思った。

(提案団体)

イベントは提案事業とは別にやる予定で、2月または3月になると思う。できたデータを大きなホールを使って流せると、参加者も、見た人の満足度も高いかと考えている。

二点目については、通学している子だけが対象ではない。今回参加費として月3000円×8で考えているが、プログラミング教室で大体週1回で月1万2000円くらい。本事業ではパソコンは用意しないので、家庭によっては買えないということも出てくるとすると、企業協賛は増やしていく必要がある。御協力がいただければ、世帯年収に応じた段階的な参加のしやすさも導入していく。

場所の問題は、こども文化センターを使えると良いが、仮に50人行きますとなると一般利用の子どもたちが使えなくなってしまう可能性があるので、区役所の会議室等をお借りするのが良いと思っている。

(委員)

マイクラフトをやることの方が目的にならないような仕組みがあると良い。

また、子どもたちが自由な発想で作ってもらったまちづくり案でも、実際の計画には反映できないことも多いことが想定されるので、子どもたちががっかりしちゃうと懸念する。

(提案団体)

学校給食のストローがバイオプラスチックに変わったのは我々の活動が発端だが、そういう実現できる事例の方が少なく、失敗する話ばかり。やることとできることは別で、子どもたちもわかっている。選択することは、自分たちで答えを作っていくことなので、多分子どもたちは失敗という感覚があまりないと思う。もし1つでも通ったら自慢して良いと、そういう感覚で集まってつながりを

作って活動している。そうした中で、昨年度川崎市の SDGs 大賞社会部門賞をいただいている。

以上